実施日の問題は炊き出し。ボランティアで参加した朝倉町母子会長の半田さん、吉井町生野さんと宝珠山村中嶋さんたちががんばりました。特に半田さんには朝早くから夜遅くまでご苦労をおかけしました。

その他、数名のボランティアの参加があり、浮羽町で日頃から活動をされている消防署員の斉藤さんや別府さん。久留米大学看護学科の学生さんは夜熱をだした子どもの看護、レクリエーション指導の浮羽町國武君等スタッフ皆さん適材適所で力を遺憾なく出してくれました。

なかなか一つの社協ではこんな事はできないと思いつつ、中でも痛快だったのが両筑の次女一二四郎こと柔道五段杷木町池田さんが、子どもたちに注意すると効き目一発！

「俺達でも言うこと聞くだろうな～」と夜須町甲斐君と話していました。

⑥生きる

さて、参加した子どもたちの感想はというと、みんな「楽しかった。また来年も参加したいです。」との事。

「当たり前やんか！えらいおおごとやったとぜ！！」

なかには若干母子父子家庭でない子どもの参加があり。

『山登りをした。まみちゃんと歩いた。いろいろ話しながら歩きました。お父さんお母さんがいない人が集まったこのキャンプはとても心に残りました。みんなはお父さんお母さんがいなくても頑張ってください。』

⑦天国と地獄

小石原の天国？から社協事務所の地獄に帰って後の資料作成に溜め息。

⑧羅生門

結果、ご意見は様々あるでしょうが、この事業の意義を考えると、私にはよく説明できません。しかし、私たち両筑地区一三市町村という一番数が少ないブロックならではできたのではと思います。

また、発起人が何を言い出すやら

THE共同作業所白鳥の家（はくちょうのいえ）

靴下はいらんですか？

浮羽町社会福祉協議会　國武　竜一

いまや、両筑管内で『靴下』と言えば『白鳥の家』。『白鳥の家』と言えば『靴下』と言われるほど（？）メジャーになってきた共同作業所です。ここ一～二年のうちに輪をかけて活発に活動が盛んになってきました。

それじゃ活動の内容はというと、靴下の糸切り・表返し。アルミ（缶）回収。牛乳パック再生イスの制作販売。クッションの制作販売。名刺・年賀状印刷。オリジナルプリントトレーナー・Tシャツ制作販売。そして何より最大の収入源として下請作業の靴下の販売活動を行っています。この販売活動が精力的に積極的に、地域にどんどん出向いて大きな声で『靴下はいかがですか？』と元気いっぱい言えるようになってきちょります。

振り返れば…

一般の会社や工場には、障害者雇用促進のお願いはおこなっているものの、頭で理解はしていただいてもなかなか実行とまでは結びつかず、この不景気の最中、逆に雇用されていた障害者の方でも解雇されたりと非常に厳しい現実があることは言うまでもありません。

そんな中、作業所の今までの作業はというと、作業所内での細々した下請け作業中心で、『作業所』というものが地域の方々には馴染みのない場所であったようです。作業工賃もほんの微々たるもので、労働意欲もなかなか起こらないような状態ではなかったかと想像します。この状態から、もう少し『共同作業所白鳥の家』を知ってもらおうと、地域に対してのアピールを始めたのが平成一〇年度です。下請作業の靴下の直接販売の許可を業者さんからいただいたのを契機に、生活必需品の靴下販売路線を確立していきました。

とにかく靴下を売ってみた

近隣の作業所での取り扱い製品はというと、焼き物（陶器）や木工工芸品、クッキーやパンといったものが多く、そういった作業ができない重度な障害の方々の作業所については、やはり下請作業のみという状態でしたので、うちはとても運が良かったようです。

靴下の販売といっても最初から順調な滑り出しであるはずがありませんでした。最初は社協職員にだましだまし買ってもらい、「ご家族にも是非どうぞ」などど言いながら反応を調べていました。私も最初のユーザーとして履きだした訳ですが、これがなかなかいい感じで、今では毎日毎日はき続け、五本の指が無くては気持ち悪いと思えるほどになっています（但し、カラー五本指ソックスは、制作担当者が引退したということで製造が中止になりました）。

靴下から広がる輪

「いい物だからみんなに履いてもらいたい」、という仲間達の思いから販売活動を一気に町内外まで広げてみました。婦人会や老人会に宣伝してまわったり、『よりあい』で足裏健康法などをやりながら「靴下、靴下」と暗示をかけてじいちゃんばあちゃんに買っても

らったり、当然社協のデイサービスセンターや近隣の社協や公民館、婦人の家に置いていただいたり、ガソリンスタンドやお寺さん道の駅、よその作業所と協力いただけるところには、遠慮なく品物を置かせていただき、販売協力をいただきました。購入者は、はじめ「障害の方のために買ってあげよう」という救済的発想で購入していただいていたようですが、今では「いい物だから買っています」というように消費者発想となり、リピーターも非常に多く、遠くは京都の方も購入していただいています。社協の事務局にも置いていますが、こちらにお客さんが来られたら、「作業所をのぞいて下さい」といって、作業所の方へ案内し、仲間や指導員との交流が広がるようにしています。作業所の仲間も地域の方との会話の機会が増え、作業所へのお菓子の差し入れや寄贈品の寄付なども多くなり、その結果作業所からは地域の方への日頃の恩返しにと、『アイ・ラヴ・ユー』の映画上映会をおこなって、多くの方々に靴下のプレゼントとともに非常に低価で映画を見ていただきました。

運動会も秋に実施して、近くの保育所園児さんやお母さん達とも楽しく過ごし、作業所では地域のふれあいを生み出すまでになっています。

今後は…

靴下は安定供給ができて、安定した収入源として落ち着きました（靴下が必需品だから）。作業工賃は当初の三～五倍で、ボーナスも出せています。おかげで入りたいという仲間も増えていますので、さらに仕事ができて、労働の喜びが味わえるように楽しい仕事を探さなければなりません。ですから作業所では、助成金をもらってパソコンや印刷機（布プリント）、軽トラックなどを購入して、新たな道を模索中です。その昔イチロー選手が言っていました。「変わらなきゃも、変わらなきゃ」という気持ちで、アンテナを張り巡らせてニーズに合った楽しい仕事をやっていきながら、地域住民との交流を図っていきたいと思います。

最後に、靴下（カラーソックス）は三足五〇〇円です。

読者の方、履いてみませんか？

問い合わせ・申込先

共同作業所『白鳥の家』

０９４３７－７－４８６６

浮羽町社会福祉協議会

０９４３７－７－８３５１

地職連新旧会長あいさつ

コミュニティワーカーの明日
～社協発足50年を迎えて～

現会長
筑後市社会福祉協議会　中山　陽一

とにかく、まず、この文章に目を通してもらいたい。読んでもらわないことには始まらないと思っている。

だから少々ぶっきらぼうかもしれないが、自分の考えを思い起こすままに書いてみようと思う。

極論から言わせてもらう。社協の「ワーカー」は、その地域を動かしきれなければ、本物ではないと思う。社協のワーカーが地域を創っていくのだ、そんな気概がなければ、地域は変わらない。地域は、きっかけを待っているのだ。地域には、「ああしたい、こうしたい」と願っている種はいくつも転がっている。そして、その思いに火をつけてくれる人を心待ちにしているのだ。

そんな地域の期待にワーカーは敏感でなければならない。

今、必要な福祉の取り組みは何か、自分のまちの福祉課題は何か、それを直感し、行動に移さなければならない。強い信念、正義感が必要だ。

失敗してかまわない。やることが大事なのだ。理屈が先行したって何にもならない。行動から入るのだ。

経験主義に批判はあるが、私は経験主義の大切な、とても大事なことがあると思っている。それは、経験することで、自分のワーカーとしての「実感」が育つということだ。

時には失敗することもある。しかし、それは、大事な成功のためのステップなのだ。失敗の原因は、やっていこうとした目標点にあるのではなく、やり方（方法）に失敗の原因があると考えてよい。何度でも行動して失敗し、何から目標点に近づいていけばよいのだ。地域というのはそういう風にフリーハンドなのだ。試行錯誤、それがまちづくりのいいところでもある。

白いキャンパスにいろいろな色を使って描いていく。間違ったときは、その上から新たな色をつけていく。そうすることで、さらに深い色になっていくこともあるのだ。

ともかく、それぐらいのパワーがなければ地域は変わらないよ、と、まず言っておきたい。

ワーカーは、持っている全身全霊を使って地域に関わっていくのだ。「このまちにはこういう取り組みが必要だ」と感じたなら、それを実現するまで執

拠に取り組んでいった方がおもしろい。それが社協という特殊な組織（福祉の町づくりを組織の目標点と掲げている点で）のあり方だし、それが社協のおもしろいところなのだ。

しかし近頃は、「あれをやっている、これをやっている」といった、活動の「メニュー」ばかりが並べられて、「まちづくり」につながるような、ダイナミックな活動、その地域が変わっていくような取り組みが見られないように感じるのは私だけだろうか。

全社協の上意下達の姿勢も問題だが、市町村を足場に活動すべきわれわれ市町村社協の「ワーカー」にも重大な問題点が潜んでいるように思うが、どうだろうか。

社協は、その「地域」を活動の基盤に、「福祉に欠ける状態」を明らかにして活動を展開するもの、と書いてある。

にもかかわらず、全社協の姿勢は、相も変わらず、戦後、新生してからもずっと上意下達の姿勢をとり続けている。あれをせい、これをせいと旗振りばかりに熱心だ。一度だって市町村社協が共通に抱えているような問題に熱心になったことがない。

また一方で、都道府県、市町村社協のあり方も、それに追従するかのように、全社協から言われたとおりのことしかしない社協も多いように思えてならない。

これじゃ自分の地域が見えてくるはずもないじゃないか、と言いたい。自分の地域が、一番なのだ。そう思えない社協「ワーカー」は、早く去ってもらいたい。自分の地域さえ変えきらないで、全社協ばかりを見て活動する社協は、地域支配の構造を地域に持ち込んでしまう旧態然とした社協をつくることにしかならないのだ。

「いきいきサロン」に象徴されるごとく、全国津々浦々の社協がこの言葉を使い、何かしらそれらしき活動を展開している。

地域住民の方では、「いきいき」、「サロン」といわれてもピンとは来ない。

地域住民と共に活動を開始するのであれば、独自の活動、独自の名称があっていいはずではないか、そんなことさえできていないとすれば・・・金太郎飴の金太郎をつくるがごとき地域でいいのか、という問題提起をとりあえずしておきたい。

上に弱く、下に強い社協ではだめなのだ。下に足場を持ち、上を創り上げていく、そういう立場でなければ、日本という国の「民主化」もはなはだ遠いと言わざるをえない。

さて、ここで、話をぐっと原点に戻して考えることにしたい。

今年、二〇〇一年は、社協発足五〇周年の年である。

その年を迎えて、今一度こんな文章を冒頭に紹介したい。

それは、社協発足に重要な役割を果たした牧賢一氏（この人物は、社協発足時、日本社会事業協会の常務理事として、社協発足を中心的に進めてきた人物で、後に、全国社会福祉協議会の事務局長となった人物である）が、「住民福祉のための社会福祉協議会活動」（一九七〇年）に書いていることである。「社協は、他の団体・機関とちがって、特定の保健福祉問題の解決を、活動の目的としていない。社協の特徴は、その地域社会で、何が早急に解決しなければならない問題であるかを見いだし検討し、そしてその解決方策を考えようとする点であり、これが他の団体・機関との基本的な違いの一つとなっている。」

この後の文章も少し長くなるが、参考になるので示しておきたい。

「なぜこういう団体が必要なのかということを、次に説明しよう。

人間社会は、つい百年ほど前までは、とても変化が遅く、社協のような、問題をわざわざ探すような組織は必要ではなかった。自然にまかせておいても、どうやらうまくいっていたのである。ところが最近のように社会経済の変動がはげしくなると、いろいろな社会問題がつぎつぎに発生してくる。ところが既存の特定の問題を対象にした機関・団体は、新しい問題に気がつくのが遅く、また気がついても対応することが困難である。

一方、問題の担い手である住民の方でも、自然科学や人間科学の発展で、いろいろな問題がやり方によっては解決可能となっていることを知らないことが多い。また知っていても、一人では有効な行動をとれないことも多く、あきらめてしまうのである。

社会変動などの結果起こってくる社会福祉問題を取り上げていくには、既存の機関・団体はあまり頼りにならない。やはり問題の担い手である住民が声を上げなければいけないのである。

ー中略ー

住民が声を上げるとか、参加するとかいっても、一人や二人では何の力にもならない。多数の人が参加し、協同してこそ大きな力を発揮することができるわけで、ここから地域組織化の必要性が生じてくるわけである。

社協のこのような働きーーー常に地域の問題を見つけだし、その解決策を考え、その実現のための活動（必要によっては自ら実施する）をすすめるーーーから、社協の基本的生活は、『福祉向上のための運動体』であるということもできるわけである。」

この文章をどう捉えるのかが、今、コミュニティワーカーに問われる課題ではないか、と提起したい。

今、介護保険時代を迎えている。介護が重大な社会問題となり、国家的な解決法として登場したのがこの制度であるが、これは、とりあえずは、「介護」の問題を医療からも、福祉からも切り離して考えようという制度である。

もちろん、医療、福祉との関係性を

深く持ちつつも、ではあるが。

私は、この介護保険がもつコミュニティケアの側面から、今、社協が引きづられていっていると考えている。

唐突に感じられるかもしれないが、社協のコミュニティワークは、セツルメントの系譜を持つものであると自覚することから始めなければならないのではないかと考えている。

何故か。

コミュニティケアは、一人の患者の治療法として、隔離された施設、病院における治療法より、地域にあって通常の人間関係、社会関係を保ちながら治療を受ける方が効果が高いとされたことから始まる発想である。

そこから導き出される取り組みとして、対象者の社会参加や地域住民の理解や協力の促進、環境改善の取り組みなど、今日、地域福祉理論で必要とされる諸活動が盛り込まれてくるのである。

介護保険は、その意味では、介護の問題を「在宅」を基本にしながら取り組もうとする制度であり、一人の「介護」を地域や制度といった周囲が取り囲んでケアをしようとする取り組みである。

この取り組みのキーパーソンは、今、ケアマネージャーといわれる人だと考えたい。

なぜなら、対象者のケアをどのように地域で仕組んでいくかを考える中心人物となるからだ。この人物に地域福祉を学んでもらうことが今、とても重要になっている。

これに対して、社協「ワーカー」は、地域そのものをどう見るか、どんな課題が地域にあるか、という「地域診断」から入っていく取り組みなのだ。

その意味では、社協ワーカーの系譜はセツルメントの活動、運動から流れてきているように思う。

セツルメントは、昔、住民がどうしたら貧困から抜け出せるかを共に考えようと貧民街に住み込み、個々の自立支援を進めると共に、生活改善や家庭、地域の関係改善の取り組みを進めていった。そして中には、貧困の原因としての社会政策に対する改良運動へと発展していった活動もある。

つまり、福祉問題を個人的に捉えるのではなく、集団的、地域的に捉え、その中の個々人の自立や全体としての問題解決に当たろうとする取り組みとして展開してきた。

地域に転がっている様々な福祉課題に対して、どのような展開が必要かを地域的に見る視点が大切なのだ。

この点をしっかり社協ワーカーは押さえる必要があるのではないだろうか。

自分の地域に目を向け、自分の地域を理想的な地域にしようという視点さえあれば、地域は変わっていく。

そのことで、社協の評価は結果的に変わっていくものだ。

「見える」「見えない」社協論議は止めにして、もっと本質的なところで社協活動を語っていこうじゃないか。その方がおもしろい。

社協に「地域の理想を求める姿勢」がなくなることの方がどれくらいその地域にとって不幸なことになるのか、社協ワーカーにサラリーマン的な存在が増えることは地域にとって不幸なことになってしまう。そのことをしっかり頭に置いて、取り組みたいものだ。

激流の中に身をゆだねて

新会長
築城町社会福祉協議会　佐々木真司

会長になる人物というのは、歴代の顔ぶれを見ても誰もが納得しえる方であったと思うし、「御苦労さま、大変だろうに」と「対岸の火事」の如くその人選を傍観していた我が身にその大任の御鉢が回ってきた。「冗談はよせ！」と水面下で必死に抵抗を試みてはみたものの、結果として引き受けざるを得ない状況になってしまった。

一生の不覚。

さて、社会福祉基礎構造改革の流れの中で「介護保険の導入」、「社会福祉法の制定」など社会福祉協議会で働いている私たち地域福祉活動職員を含む社協を取り巻く環境が、大きく変革してきている状況の中で、社協はいったいこれからどうあるべきなのか、どのようにその社協としての存在を示していけばよいのか、改めて問われていると思います。

社会福祉事業法の抜本改正に伴い法律名が社会福祉法に改称され、新法で、『社協を地域福祉の推進役』として明確に位置付けられ、その推進の役割を社協に期待し（応えられるかは別として）、その社協で中心的役割を担っていかなければならないのは、他ならぬ私たち地域福祉活動職員でありたいと思います。

その地域福祉活動職員のみなさんの所属している社協の現状はどうでしょうか。財政的、組織的な脆弱さを抱える社協（他にまだ「ある」という方もいらっしゃるでしょうが）にとって、基本的機能としての地域組織化活動（当事者活動、福祉教育、啓発活動、調査活動、相談・情報活動等）を展開しながら委託事業、介護保険事業や地域福祉権利擁護事業と、これらの事業を抱えてやっていくということは、並大抵のことではできません。

そのような状況をまず押さえておいて、地域福祉活動職員で構成されている「連絡会」の現状は地域福祉活動職員のみなさんにはどのように映るのでしょうか。かつては、福祉活動専門員で構成されていた「連絡会」、つまり一社協、福祉活動専門員ひとりが会員であったのが、時代のニーズに対応するために地域福祉活動の枠組みが広がり、

会員の枠が拡大され今日に至っています。しかしながら、業務多忙のためか、役員会や総会への出席率も従来の比ではありません。いずれにせよ、「連絡会」は構成員も含めて、その「連絡会」のあり方も問われていると思います。

「連絡会」はどうあってほしいのか、会員として何ができるのか、会員が抱えている課題が何なのかを共有できるようになれば、個々の課題解決につながるのではないでしょうか。その前提にあるのは、会員一人ひとりが社協に対しての、また、「連絡会」に対しての『こだわり』ではないでしょうか。

社協で働いている「あなた」はどんな問題意識をもって日頃の業務に携わっておられますか。その問題意識を支えているのは「あなた」の資質に大きくかかわってくるのではないでしょうか。

敬愛される方が、以前、次のように語っていたのを思い出し、自戒を込めて結びとします。

仕事をするうえで大切なことは、「大事なことは人と接する際の『感度』ともいうべき資質が極めて重要」だと。「その資質とは、他者への共感力や意欲、人間のしがらみに耐える力、腰の軽さ、立ち止まる勇気、経験、価値観や専門的知識などの集積」だと。

とりあえず、「討ち死にしないよう任期（二年）だけは全うし、必ず次の人に引き継ぎをするぞ」と、決意を新たにしています。

役員のみなさん、会員のみなさん、どうぞよろしく。

福岡県地域福祉活動職員連絡会
新役員紹介

会　長　佐々木　真司（築城町）
役　員
【福岡ブロック選出】
肥田　剛（二丈町）
岐部　健一（須恵町）
森　直人（津屋崎町）
１名、ブロック内にて調整中
【筑後ブロック選出】
武藤　和典（瀬高町）
大石　愛子（立花町）
２名、ブロック内にて調整中
【両筑ブロック選出】
能塚　治一郎（小郡市）
池田　孝司（杷木町）
國武　竜一（浮羽町）
村山　真知子（大刀洗町）
【筑豊ブロック選出】
藤川　征典（飯塚市）
安部　知彦（芦屋町）
三根　伸高（遠賀町）
山本　和恵（桂川町）

編集後記

「まなこ」編集委員長
玄海町社会福祉協議会
水上　恵二

わが社協に入社（？）して、はや四年が過ぎようとしています。社協に入るまで、社協の存在すら知らなかった私が最初に思ったことは、役場の人、地域の人、民生委員、ボランティアさんなど、毎日毎日新しい人と出会いがあるということでした。

あまり記憶力のない私は、いきなり全部の人は覚えられないので、忘れたり勘違いして失礼なこともありました。

特に「この前は、お疲れ様でした。」という攻撃。今では自分の方からごく自然に出る言葉ですが、当時は、『この前？・・・。いつ？。何の時に？。ほんとに会った？。』と、その場は適当なあいづちで応戦しますが、聞くに聞けないので、『ほんとは何なんだろう』と考えることもありました。

このような人との出会いは、地域だけではなく、研修などの機会にも訪れます。県内各市町村の、しかも同じ職種の人たちが集まる研修では、すばらしい出会いが待っているように思いますが、近隣の市町村や地区など、よく知っている人たちとの交流が主で、それ以外の人たちとはあまり交流していないように思います。

そこで登場するのが「まなこ」です。

「まなこ」は今年で創刊二七周年という歴史を持ち、県内だけでなく、日本全国に発信しています。

実際に話しをした事がなくても、記事を読むことにより、その人の考え、その人のことを知ることができます。

「まなこ」に掲載された人は、記事を通して、全国のいろいろな人たちに出会っているのです。

いわば「まなこ」は、「出会いのキューピット様」なのです。

また、キューピット様の活躍はそれだけではありません。ちょっと社協の倉庫にあるダンボールをひもとけば、熱い想いとピュアなハートのあなたが「新人紹介」のページに載っています。

そうです、キューピット様は、過去にだけ行けるタイムマシンに乗って、現在のあなたを過去のあなたに出会わせることもできるのです。

『ＩＴ』だ、『介護保険』だ、『そば道場』だと忙しい日々を送っていることと思います。仕事に疲れたときは、倉庫にあるタイムマシンに乗って、あの頃の自分に・・・。